

「差」字の意味と乖離した「差す」表記の成立について

山口翔平

一般的に、和語の漢字表記は和語と漢字の意味に共通性があるから用いられる。例えば、「刺」字の表す意味と、和語「さす」の表す意味に共通性があるので「刺す」という表記が可能となる。しかし、現代における「差す」という表記は、①「差」字と「さす」の意味に共通性がない、②様々な意味に広く用いられており、特定の意味に対応しているわけではない、という2点で一般的な漢字表記と異なっている。

「差」を「さす」と読むことについて、三保忠夫(1980)「古文書における「差(さす)」と「遣(つかはす)」について」(『国文学攷』86, 広島大学国語国文学会)では「指名する・任命する」という意味の一致によるものとしており、この意味の共通性に端を発する表記と考えられた。そこで、「差」字の意味と乖離した「差す」という表記の成立過程について、「指名する」の意味に注目して上代から順に「さす」の表記と、「差」字の意味を追って調査した。

その結果、上代の漢文には「指名する」の意味の「差」字が用いられており、和語「さす」の意味と対応していた。このような、漢文における「差」字は「さす」と訓読することも可能であったと考えられる。

中古に入ると、古文書での漢文に徐々に「差一」という形の複合語が増える。当初は字義と一致する意味で用いられていたが、「差一」という語の使用が増えるにつれて徐々に和語の接頭語「さし一」の影響を受け、漢文の「差一」も接頭語として解釈されるようになったと考えられる。そして、「差」字の意味から乖離した例が現れるようになる。

このようにして「差」字が接頭語化し意味が希薄となり、「さす(さし一)」という読みとの結びつきだけが強くなった。その結果、院政期の『今昔物語集』で和語「さす」に「差」字が広く用いられるようになったと考えられた。漢文で既に意味が希薄化していた「差」字は、「さす」の意味と乖離していても用いやすく、これまで漢字表記されたことのない様々な意味範疇を便利に表記できる字として用いられることになったのだと考えられる。